

# 芥川だより

発行日 \* 2020年2月1日 e-mail: ab\_87968624@yahoo.co.jp  
最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集・発行人

下村嘉明

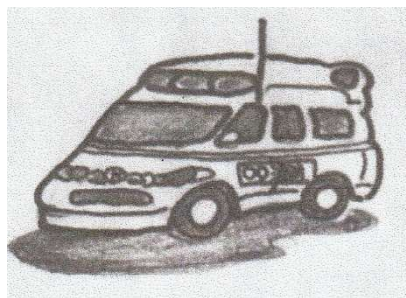
〒661-0951

尼崎市田能5-3-10-601

☎090-8796-8624



\*\*\*\*\* 一部200円です \*\*\*\*\*



## 運よく助かる、皆さんに感謝!!

「ああ…」と思う間もなく8段余りある階段を仰向けになって踊り場まで落ちてしまった。何が何だか分からず、意識も朦朧とし身体も動かない。友人が来て何か言っているがよく聞こえない。友人が手配してくれた京都市の救急車に載せられ府立医科大に運び込まれたらしい。夜中の救急外来で当直の医師や友達が何か言っているのだが、うまく受け答えが出来ない。意識も飛び飛びな感じだったが、友人が「下村、しっかりせい!」と怒鳴っている声はハッキリ聞こえた。これは大変

なことになったんやと思った。

まな板の鯉のように服を着替えてもらいCTの検査を受け、頭から足先まで異常がないか調べ、耳から出血した箇所を縫い点滴が始まる。半分寝ているようで記憶も定かでないが、とにかく身体中が痛い、特に膀胱に差し込まれたドレインはたまらんかったので、取ってもらい尿瓶で排尿をするようにしてもらった。

1階の集中治療室で治療を受け、翌日6階の脳神経外科病棟の観察室にかわった。少し落ち着いてきて大きな後遺症もなく助かったんやと思うようになった。友人二人は明け方まで付き添って励ましてくれた。家内も深夜にも関わらず車を飛ばして病院に来てくれた。3日目からは面会制限をなくしたので多くの友人たちが見舞に来てくれた。そして1週間後退院することになった。もう少し入院していたかったのだが、治療をすることがない患者を入院させておくことは出来ない、という医師の説明であった。退院の際、「この程度ですんでよかったですね」と回診の教授に言われた。

自分の不注意で多くの皆さんにご迷惑・ご心配をおかけして申し訳ない。まさか自分がこんな目に会うとは夢だにできなかった。しかし、入院すると家族や友人らの有難さが身に染みる。幸いケガの回復も早く日常生活に戻れました。婆ちゃんの介護もまた始めます。

死をめぐるあれやこれ(63)

石川 吾郎

死を国土にばら撒く安倍政権

フクシマ原発事故がアンダーコントロールだと世界中をだましてオリンピックを招致した安倍氏の言うコントロールの内容の一端が明らかになった。安倍政権は除染土を「再利用」と称して、全国にばら撒こうとしているのだ。

福島県の除染で回収をした汚染土や廃棄物のうち八千ベクレル／キロ以下のものを、全国の道路や鉄道などの盛り土や、公共事業や農地にまで使えるようにする方針をすでに出している。このほど安倍政権は、責任の所在も使用基準もあいまいでお粗末な内容の環境省「省令案」に対して意見を募集した(いわゆるパブコメ。これはすでに締め切られた)。原発事故前の再生利用の基準はセシウムで百ベクレル／キロであったものが、事故後には八十倍の高濃度まで基準自体が緩められてしまっている。

そもそも、環境汚染を取り除くために除染し集めたものを、また日本全国にばら撒こうとするのは意味がわからない。国民すべてを被爆させて、日本全国を「フクシマ化」する意図があるとした考えられない愚行だ。

放射性物質は集中管理をすべきであり、環境の中に拡散すべきではない。このままでは、高濃度の放射性物質を含んだ除染土が、我々住民の知らぬ間に身近な場所で再利用されて、子どもたちも被爆をしてしまう。(裏に続く)

日本全国がそんな国土にされてしまう。安倍政権は放射能汚染物を計画的に全国に配置して、すべての国民を永続的に被爆させるという、壮大な人体実験を行おうとしている、といえる。

この汚染土のバラマキを止めて、まともな政策に転換させることを迫っていく必要がある。尚、情報についてはNPO エフ・オー・イー・ジャパンのサイトを参照ください。

## 芥川だより一五七号 目次 ページ

巻頭エッセイ	1
下村嘉明	
巻頭コラム	1
石川吾郎	
素老人☆よもだ帳 71	2
坂本一光	
哲学爺いの時事放談 21	3
祖蔵哲	
大峰奥駈道 29	5
下村嘉明	
大人の今昔物語 64	6
石川吾郎	
B級サラリーマン渡世譚 79	7
明石幸次郎	
オクラの山たより 41	8
因了生	
隠された歴史 16	14
満田正賢	
道をゆく 10	16
成瀬和之	
編集後記	17
嘉	
ふみの道草 2	18
山椒魚	
俳句	18
土田裕	
影山武司	

### 素老人☆よもだ帳 (71)

坂本一光



#### ◆「週刊新潮」表紙絵画家のエッセイ集

成瀬政博 文「画」表紙絵を描きながら、とりあえず。」(白水社、二〇一九年)という本を読んだ。本の帯の表には、「記憶の中の『戦後』 一九七〇年十一月二十五日、あなたは何をしていましたか? 週刊新潮で二十年にわたり、表紙絵を描き続けてきた画家の記憶」と何やら思わせぶりな、しかし本を開いて見たくなるような言葉が並んでいた。

素老人は、何の脈絡もないが、それは三島由紀夫が死んだ日ではないかとふと思った。後で本を読んでみるとその日であり、その日の成瀬氏の記憶が記されていた。素老人はと言えば、当時大学の四回生であったが、その日の夜は徹夜のアルバイトに入っていた。名神高速道路の上り線、大津パーキングエリアにあった近鉄のレストランで、夜八時から仮眠三時間を挟んで翌朝八時までの十二時間勤務であった。今思えば不思議なくらい、夜中でも次から次へ客があり、仮眠が取

れないこともあった。素老人は貧しかったが、世間は高度経済成長の絶頂期の頃だったのだろう。仕事であれ旅であれ、人は昼夜を問わず絶え間なく移動していた。バイト代は一回一万円で、週一の勤務であるがそれで一ヶ月十分に生活ができた。夏に大学院を(受けてもいないのに)落ちたので一浪すると実家に宣言し、迷惑はかけないと言った手前、このバイトは命綱であった。どうでもいいことであるが、素老人が実際に大学院を受験し合格したのは翌年のことである。

そのバイトの夜のことである。四名ほどの学生がバイトに入っていたが、顔見知りはいなかった。その中の二人が、三島の死を驚きと感動を持ってバイトの間じゅう話し続けていた。彼らにとって三島は憂国の志士であった。別の一人は全く関心のない様子で、仕事(食券売りと配膳)に集中してくれよとこぼしていた。素老人の感覚もそれに近かったが、何が彼らをそれほど興奮させるのか、到底理解できなかった記憶がある。

一方、帯の裏にはこうある。

「このとりあえずは人生でも同じような気がして、とりあえず、とりあえずの結果こまできたような、そんな思いになることもないではありません。そんなとき、さっきの絵の話じやありませんが、とりあえずの連鎖の中で、ふと自分はこんな人生を求めているのかと訝しみ、やがては諦めに、ときには納得に変わるも

の、それが人生のような気がします(「とりあえず、あとがき」より)」、と。

さて、この本には、著者の「記憶の中の『戦後』が五十四のエッセイとして収められている。その中から、とりあえず、素老人がここに紹介したいのは「校長先生のスピーチ集」と題する次のエッセイである。

「Sさんは、一九四八年生まれ、ごくよりひとつ年下です。大阪の下町にあった保育所で知り合いました。僕はそのころ、父子生活でした。二人の子供を保育所にあずけてサラリーマンをしていたわけです。Sさんは大学院生。奥さんは小学校の先生。やっぱり二人の子供がいて、同じ保育所にあずけていたのです。ぼくもSさんも三十歳に手が届く年齢で、なんとなく気が合って、読んだ本の話などしていると楽しかったものです。

Sさんが大学で勉強していたのは化学です。化学のことなどぼくはまったくでチンプンカンプンでしたが、Sさんは文学も好きだったので読書談義もできたわけでした。

Sさんが長い学生時代を終えて、やっと就職ができたのは三十代半ばのこと。ぼくが脱サラをして絵かきをはじめたのも三十代半ばのころ。Sさんの就職先は山陰地方の大学で、単身赴任でした。ぼくはそのころには再婚もし、子供の数も五人に増えていました。

それからしばらくして、Sさんは本を出版しました。とても分厚い本で、何が書かれているのか、ぼくには到底理解の及ばぬ化学の本です。この本の装幀を頼まれ、化学の本としてはちよつとオシャレな本に仕上がりました。

それから何年かがたつて、大阪から長野県に引越していたぼくのところへSさんはやつてきて、大学の宣伝のためのグッズにぼくの絵を使いたいとのこと。国立の大学がこんなことをするのかとぼくはおどろきながら、当時学生部長をしていたSさんと大学論議に花を咲かせたものです。

それからそれからまた何年かが過ぎて、Sさんから一冊の本が送られてきました。本を手にしたぼくはこのときSさんが大学の附属中学の校長先生であることにびっくりしたものです。そしてさらにびっくりしたのは、この本の内容です。

中学の校長先生は生徒や父兄の前で折々の機会、あいさつや訓示をします。その小さなスピーチの数々を、Sさんはひとつも漏らさないで文章化し、本に仕上げていたのです。

始業式、入学式、修学旅行結団式、交通安全教室、PTA評議会、教育実習開校式、全校集会、体育大会壮行式、等々、ほんとにたくさんのあいさつやスピーチをするんですね。本にしたら数ページにわたるものもあれば、一ページ、数行のものまで、Sさんが話した言葉がすべて

記録されているのです。なんと几帳面なことでしょう。こんな本、見たことありません。このことに驚きながら読み進むうち、おどろきは感動へと変化したのです。この感動、どのように伝えたらいいでしょう。

Sさんは、話す時間にすればほんの数の分のものであつても、彼の思想、知識のすべてを総動員し、結果生まれた言葉を生徒たちに、とてもいいねいに手渡そうとしているのです。ときには生徒たちにとつて、背伸びを必要とするかもしれない言葉だとしても、Sさんは真摯に語りかけます。詩が引用されることもありま

す。難しい理論を説きほぐすように語ることもあります。大人のぼくが、なるほどと教えられることも多々あります。読み終えてぼくは、Sさんはいま、天職を獲得したのではないかと思えました。化学の研究については門外漢のぼくは何も言えませんが、五十歳を過ぎて、どのようなめぐり合わせがあつたのか、Sさんは全身校長先生をしていたのです。人間と教育にたいする信頼と希望に満ちた校長先生のスピーチの数々に、ぼくはひとり乾杯したものでした。」

とりあえず、と言いながら、ここまで成瀬氏のエッセイの全文を紹介してしまつた。それにしても、Sさんの経歴のなんと素老人のそれと似ていることか。イニシャルの一致だけのことなのだろうか。

とりあえずの疑問は、それである。  
(かたちは心であり、心はかたちになる)

#### ■大分の素老人

### 哲学爺いの時事放談(21)

祖蔵 哲

#### ウイルスとの戦い

##### 感情の哲学

すでに21世紀のも2デイクaid(2×10年間)に入っている。つまり2020年代はもう始まっているのである。日本式年号「令和」は国内的には一定の意味をもっているが、地球規模で日本を考へる時には大きな障害となつてい

る。日本国は古来より決して、「単一民族」からなる国ではなかつたし、そもそも現在の国民国家の世界に「単一民族国」のなごは存在できるはずがないからである。地球から完全に「隔離」されている国などはない。その例が年明けに起こつた。新型ウイルスの発生である。

1月20日、中国・国家衛生健康委員会は、武漢市で新流行性肺炎の原因ウイルスがヒトからヒトへと感染すると確認したことを発表した。今のところアウトブレイクは中国大陸に現局されているが、ウイルスは世界各地に拡散しつつある。一世紀前の1918年「スペイン風邪」以来、2003年「サーズ」、2012年

「サーズ」に続く「パンデミック」になるかとみられている。パンデミックとは何らかの病氣、特に感染症が、ある国の中のかしこや、国境を越えて世界中で流行することである。その規模に應じてエンデミック、エピソード、パンデミックに分類される。このうち最も規模が大きいものがパンデミックである。パンデミックはしばしば「パニック」を引き起こす。

こういった大規模な疫病の拡大は世界歴史的には過去に何度か起こっている。14世紀には黒死病(ペスト)がヨーロッパで大流行した。その後も繰り返した疫病の流行は人々に「不安」や「恐怖」の「\*感情」を引き起こし、「隔離」や「回避」「差別」となりパニックになって大量殺戮の心理的引き金を形成し、300年後の17世紀の「魔女狩り」や「ユダヤ人狩り」といった集団的パニックに影響を及ぼしたとも見られている。魔女もユダヤ人も目に見えない得体の知れない危険なもので、それは病原菌と同じく感情「恐怖」なのである。

本年1月号でも書いたが、20世紀末の「東西世界との戦い」から「ポスト冷戦」に入った世界は21世紀になりアメリカによる「テロとの戦い」で幕が落とされた。そこでは、「テロ」というその言葉の語源「恐怖」という「目に見えない対象」に対する「感情」がさらに「いつ、どこで、だれが」起こすかわからないと

いう「不安」から特定の国家や人種が「目に見える対象」として一括りにされ「差別」「隔離」「敵」になっている。

そして、世界は「情報戦争の時代」にはいり「フエイクニュースとの戦い」が繰り広げられている。そこでも「目に見えない情報」「言葉」が「事実」や「理性」よりも「感情」を引き起こし「新たな事実」(ポスト・トゥルース)を作り出している。その中に今回の「病原菌との戦い」である。そこにもまた「不安」「恐怖」「差別」といつて共通的な「感情」が隠れている。私たちにとって、この一番身近な「感情」、だれでもわかっているように、それは何かと聞かれたら容易に答えられない。それを考えるのが「哲学」である。

## (1) 感情とは何か。

### ↳ 科学の感情「情動」

感情(emotion)とは、人間などの動物がものごとや対象に対して抱く気持ちのこと。この気持ちは極めて個人的なものである。ある物、例えばコップを前に、「これは何ですか」と問われれば、「それはコップです。」と答えることは全く自然でだれも異論はない。しかし、「このコップを見てどういう気分ですか」と問われると、その返答は人により千差万別で皆が正解という答えはない。このように感情は主観的なものである。

一般に感情は「喜び、悲しみ、怒り、

諦め、驚き、嫌悪、恐怖」などの種類や区分がある。動物が「感情」を持つのかということは、動物に「心」があるのかということと関係する。そこで、精神医学・心理学では感情(emotion)と気分(mood)を区別することがあり、この区分されるときに感情は「情動」と呼ばれる。この「情動」は主に環境刺激によって比較的急速に引起される一過性の過程であるとされ、呼吸、循環、消化などの生理的諸機能に激しい変化が生じる。

そして、接近、回避などの強い運動傾向を伴い、行動の攪乱状態が生じるとされる。「パニック」などはこの類であろう。一般に感情のうちで、この「情動」は比較的動物にもあるようであるが、「悲しみ」や「憎しみ」「愛」などは動物にはないので「社会的」「文化的」感情であり、それだから動物には心はないとされている。人間の社会や文化は「言語」と関係が深い。「言語」は人間だけがもつとされる故に動物は心がないとされるのであるうか。「心」と「感情」の区分や実態は現在もはっきりしていないが、「感情」の体系的発生は哲学、心理学、自然科学とも少しの共通がみられる。

現在では「それは何か」を説明するのは心理学も含む「自然科学」の役割であり、ほぼ全員が賛同し「信じて」いる。

その根拠は科学が「実証主義」の立場をとっているからである。実証主義とは経験的事実に基づいて理論や仮説、命題を

検証し、超越的なものの存在を否定しようとする立場である。つまり、試験や実験を繰り返してそれを再現、体験、感覚できるものにするのである。この再現、実験が技術の進歩より可能になったので科学が信用されるようになってきたのである。しかし、それ以前では「哲学」が現在の科学の役割を果たしていた。古代ギリシャ哲学の中心的な問題は「万物の根源は何か？」という問いから始まった。根源アルケーをタレスは水、ピタゴラスは数と考えた。そして感情についてアリストテレスは、それは「驚き」から始まるといっている。

この「驚き」は不思議なことに現代の動物進化的感情分類と共通する。動物学では感情の「基本分類」の最初に注意覚醒系の「驚き」を挙げている。これは生命の発生段階からの古いシステムであり反射行動の基本であるらしい。これが次に原始情動の「快・不快」に結びつき、さらに「基本情動」の「喜び、恐れ、嫌悪、怒り」が生まれるとされる。ここまでは動物に共通であるが、この先の「愛情、悲しみ」になると哺乳類だけに備わり、さらに身体変化の伴わない感情「愛、不安、憎しみ、軽蔑」などは人間に特有の文化的感情であると分類している。

## (2) 哲学の感情「情念」

先にも話したように、心理学や精神医学のような「科学」が感情を「何である

か」という分析を行う。それはその原因を脳に求め、そしてさらに局在化して、どの箇所が刺激をされるとどのような感情が発生するのかといったメカニズムを解明する。これは人間を機械として想定しているからだろう。心理学も同じく、実験を繰り返して、データを集積して、それを分析することにより、パターンを読み取ろうとする。しかし、人間はこのような自動機械なのだろうか。

哲学も過去に同じような難問に直面していた。400年も前、17世紀、デカルトの時代である。かれは「我思う故に我あり」という言葉で有名なように、「精神、心と物」を二分する「心身二元論」を主張した。しかし、それでもなぜ身体を酷使すると心が疲労感を感じ、怖いものを見ると心に恐怖心が生まれるのかという「心と身体の関係」についてうまく答えられなかった。

哲学での感情は伝統的に「情念」(passion)とこの言葉が使われている。「パッション受動」という意味からわかるように意志や思考のように自分から主体的に能動的に発動するのではなく、状況の認知や、他者との関係によって発生・増減するという点では、自己に対して外的なものでありながら、他方でそれらが行為や選択の動機となり、また行為者の人柄や性格に深く関わっている点では内向的である。これらは日常生活の中で多かれ少なかれ誰も経験する精神状



態であるが、しばしば冷静な合理的理性判断を疎外し、悪行や犯罪の原因ともなる、いわば人間性の負の側面を形成するとみられる。よってこの「情念」は善悪の問題、つまり倫理や宗教も議論と対象となる。

哲学的感情論「情念」のこの「心の受動」は「能動としての意志」からは「自由意思」の存在問題。そして「善と悪」からは「倫理道德問題」が導かれる。基本的な構図は、「対象(物)」―「感覚」―「感性」―「知性」―「理性」のように考えられる。物である「対象」を同じく物である人間の身体感覚が「心、精神」にどのよう to 感情を伝えるのかということである。しかも、「大きさ、重さ、色、匂い」などと違い、「感情」は物に属するものではない。しかし、それが物から与えられるのである。そして一旦与えられた「情念」は自分のものとなるとそれは「内的情念」となり「内なる他者」として自己の対象となる。ここでも能動的意志がいかに「情念」にかかわることができるのかを検討される。

哲学の感情論「情念論」は総論的にいうと、「理性」が「感情・感性」をコントロールできるのかという問題になる。そこで、今回のテーマ「ウイルス」に移る。

(3) ウイルスと感情の哲学の問いとは回りくどく「感情」定義から始めたが、やつと具体的「時事、事実」に戻って「ウ

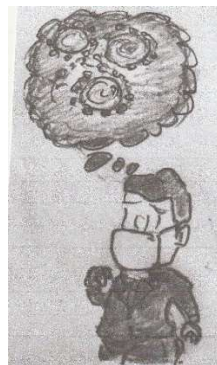
イルス伝染の哲学」に入る。以前から言っていることであるが、『哲学とは問い』を作ることだ。とすると、現在の「コロナウイルス事件」の問いは何かである。

まず事件は「未知のもの」に遭遇した感情「驚き」からはじまった。それは「死」を予期する時、感情「不快」を呼ぶ。そして感情「恐怖」になり「忌避」「嫌悪」に続き、行為「区別」「差別」「隔離」につながる。現時点で、(感染者がいるとされている)「クルーズ船」が日本を含め各国に入国を拒否「忌避」され「受け入れ国がなく公海を彷徨っているらしい。また一方で感情の「言葉」はインターネットでさながら、病原菌ウイルスのごとく拡散、増幅され感情「嫌悪」「差別」を伝染させている。

問われているのは何か。感情ではなく、「対象」そのものである。残念ながら「情動」や「情念」では「対象」は正確に捉えられない。それには「理性」によって「知性」を働かすということが求められる。「感情」や「言葉」をいくら分析してみたところで本質は取り出せない。そこでは平気で「隔離」や「検疫」という名目で安易に「自由」が奪われる可能性がある。そして「恐怖」は歴史の教えとおなじく「デマ」や「煽動」によって「パニック」「ホロコースト」に容易に綱がかかる。哲学の問いは「理性は感情の奴隷か」である。

冷静になって考えようというのは意外

に難しい。冷静すぎると感情のない冷たい人だと言われる。「感情・感性」も「理性」も関係しない純粋な「知性判断」というものが人間には持てるのだろうか。「ウイルスとの戦い」これも今世紀の「新しい戦い」である。



## 大峯奥駈道(29)

下村嘉明

### 米寿に挑戦する男

戸田巽(大正13年12月15日生まれ)

天保山から480km歩き、富士山に登る  
平成23年8月12日(金)〜28日(日)

○ 1日目 8月12日(金)

計画 天保山〜高槻 35, 5 km

結果 天保山(9時スタート、高槻19時18分着(西国街道盤手社神社御旅所跡))

歩行距離 42, 5 km

○ 2日目 8月13日(土)

計画 高槻〜山科 33 km

結果 高槻(7時10分スタート、山科19時18分着(JR山科駅))  
歩行距離 35, 4 km

○ 3日目 8月14日(日)

計画 山科〜篠原 34, 5 km

結果 山科(7時10分スタート、道の駅かがみの里18時42分着)(篠原の手前1 km 38, 1 km)

○ 4日目 8月15日(月)

計画 篠原〜米原 32 km

結果 道の駅かがみの里(8時10分スタート、米原18時着(JR米原駅東口))  
37, 3 km

○ 5日目 8月16日(火)

計画 米原〜大垣 35 km

結果 米原(7時57分スタート、大垣18時17分着) JR大垣駅近くの寺内町  
35, 9 km

○ 6日目 8月17日(水)

計画 大垣〜枇杷島 32 km

結果 大垣(7時49分スタート、枇杷島18時着)(西枇杷島警察署前・JR枇杷島駅前) 35, 4 km

○ 7日目 8月18日(木)

計画 枇杷島〜新安城 34 km

結果 枇杷島(8時03分スタート、新

安城18時40分)(名鉄新安城駅)  
38, 2 km

○ 8日目 8月19日(金)

計画 新安城↪小坂井 34 km

結果 新安城(8時05分スタート、名鉄伊奈駅着19時10分)(JR小坂井駅の近く) 38, 8 km

○ 9日目 8月20日(土)

計画 小坂井↪高塚 36 km

結果 名鉄伊奈駅(8時10分スタート、高塚20時05分着)(JR高塚駅) 38, 9 km

○ 10日目 8月21日(日)

計画 高塚↪掛川 35 km

結果 高塚(8時06分スタート、JR袋井駅17時50分着)(掛川の10 km手前) 28, 6 km

○ 11日目 8月22日(月)

計画 掛川↪岡部 35 km

結果 JR袋井駅(8時15分スタート、JR藤枝駅付近交差点17時15分着)(岡部の7 km手前) 35, 6 km

○ 12日目 8月23日(火)

計画 岡部↪由比 35 km

結果 JR藤枝駅付近青木交差点8時スタート、横砂交差点18時着)(JR由比

駅の8 km手前) 34, 8 km

○ 13日目 8月24日(水)

計画 由比↪富士宮 23 km

結果 横砂交差点(8時25分スタート、富士宮18時45分着)(JR富士宮) 37, 7 km

○ 14日目 8月25日(木)

計画 富士宮↪スカイポート富士 24 km

結果 富士宮(9時30分スタート、篠坂交差点11時40分)(篠坂から富士宮一合目までは集中豪雨のため通行止) 8 km

○ 15日目 8月26日(金)

計画 スカイポート富士

結果 富士宮口一合目1460 m(8時27分スタート、五合目2400 m14時14分着)(歩行累計498, 2 km) 13 km

○ 16日目 8月27日(土)

計画 ↪宝永山荘

結果 富士宮口五合目2400 m(11時10分スタート、宝永山荘11時40分着) 登山 0, 7 km

○ 17日目 8月28日(日)

計画 宝永山荘↪山頂↪砂走り↪宝永山荘 標高差1286 m

結果 宝永山荘(5時スタート、富士山頂10時20分↪12時05分、宝永山荘15時25↪55分、五合目16時11分 登山 10, 3 km

サポーター 実人員32名、延べ66名(内訳、山仲間12名、ウォーク仲間17名、家族・親族3名)

以上が戸田さん歩かれた時の記録です。皆さん如何ですか？

次号で私の想いを書いていきます。

## 大人の今昔物語(六四)

石川 吾郎

今回は、空想を交えた艶笑奇譚という趣きです。教科書に出ない度は五／五。

へびに嫁いだ女を、医者が治した話し(巻第二四 第九話)

今は昔、河内の国、讃良の郡(さらら現在の四条畷付近)、馬甘(うまかい)の里に住む者がいた。身分は低い者であったが、その家は裕福に暮らしていた。一人の娘がいた。

四月の頃その娘が蚕の餌のため、大き

な桑の木に登り、葉を摘んでいた。桑の木は大路のほとりに立っていた。大路を往来する人がくだんの桑の木を行き過ぎるとき、ふと見ると大きなへびが出てきて、娘が登っている桑の木の根元に巻き付いてきた。道行く人は、これを見て娘にへびが木に巻き付いていることを知らせた。娘はこれを聞いて驚き、下を見てみると本当に大きなへびが木の根元に巻き付いていた。

娘は怖がって木から飛び降りると、そのへびはすかさず娘に纏い付いてたちまち交わった。娘は身体が焦がされるようになり、気を失って桑の木の根元に横たわった。

父と母はこれを見て泣き悲しみ、すぐに医者呼びにやり診てもらおうとした。この国にはすぐれた医者がいたので、これと呼び事情を話した。その間、へびは娘に嫁いだまま離れなかった。

その医者の曰く「まず娘とへびを同じ戸板に乗せ、速やかに家に連れ帰り、庭に置くように」と。親はさっそくその言葉に従った。

その後も医者の言うに従って、稲塚の藁三束を焼いて、その灰を湯に混ぜた汁三斗(三十升)を取って、これを煎じて二斗まで煮詰め、イノシシの毛十把を刻んで粉末にして、その汁に混ぜ合わせ、娘の身体を二つ折りのようにしてつり下げ、その汁を娘の隠し所の口に入れる。一斗ばかりを入れるとようやくへびは離

れた。這いだして逃げようとするのを打ち殺して捨てた。このとき、ヘビの子どもたちは凝り固まってカエルの子のようにあり、例のイノシシの毛がヘビの子どもに突き刺さって、隠し所から五升ほども出てきた。ヘビの子どもが皆出てしま

うと、娘は目が覚めて、びっくりして物が言えるようになった。父母は泣く泣くこの事情を尋ねると、娘は「自分ではさっぱり記憶がなく、夢でも見ているようでした」と。

こんな具合で、娘は医者の方方によって命が助かったので、その後はふるまいを謹んでいたが、その後三年ばかり経ち、またこの女にヘビが嫁いで、とうとう女は死んでしまった。こんどは、「これは前世からの因縁である」と知って、治療をすることはなかったということだ。但し、医者の方、薬の効力には不思議なことであるよ、と語り伝えられているとか。

### 《コメント》

現実にはあり得ない荒唐無稽な話し。空想にしても、こういう空想をするエネルギーの源を知りたいと思ってしまう。それにしても、この主人公の娘は何と可哀想なのでしょう。同じ酷い目に二度も会い、二度目には命を落としてしまう。不運にも程があるかというものです。

ところで、ここに出てくる「嫁ぐ」という言葉が、どんな状態を指しているのか、

考えてみると、ギモンが次々に湧いてきます。

近年「嫁ぐ」という言葉は、結婚するということの、ちよつと上品な言い方として使用されるようですが、古典のなかではもともと、もつとあけすけに性行為そのものを指して使用される場合が多いようです。

尚この説話には出典があり、仏教説話集の『日本霊異記』中四一に、収録されているということです。

### B級サラリーマン渡世譚(79)

明石 幸次郎

担当者の役割(韓国編 その31)

明石は韓国D工業との、値上げ交渉のカードにしようとした、納期短縮の見通しが立ったので、M本との電話を終えてホッとした。

しかし、M本と約束した5%以上の値上げを実現できるかは、当たって砕けろだが、初めて会う韓国人相手と現地で交渉して上手くいくかを考えれば、楽天的な気持ちから、不安な気持ちにもなってきた。

もし、値上げが出来なかったら、自分の評価が下がるが、考えてみれば、転勤

したばかりの自分に、出張してこいと指示する上司もエエ加減なのか、其れとも、チャンスを与えてくれる腹の据わった人なのか、分からなかった。

これを高校野球で例えるならば、夏の大会で入部したばかりの1年生の明石を2アウト満塁で、ヒットか四球を期待して?レギュラーの3年生のM居に代わり、急遽代打を送るようなものである。

代打で打席に立つからには、見逃しの三振だけは避け、もし三振しても、思い切ってバットを振り回して、相手に印象を残し、自分でも納得出来るようなスイングをしようと思った。

横に居るM居が、M本との電話の話を聞いていたのか「明石、工場は納期短縮に協力してもらえそうか?よかったやないか!それと、田植機のモデルチェンジのことやけど、推進部のS島は俺の同期で、彼がキーマンやから、中国向けの話は明日でも、根回しをしておくので、心配するな!」と言われた。

明石は「M居さん、根回しと言われませんが、国内向けに開発したモデルは、そのまま中国には輸出できないのではないですか?中国は国内の10倍以上の稼働時間と言われていますが、新型は中国を想定した設計になってないですね!それに当然、中国向けの実績がないので、絶対に出せないとなるのではないですか?」と言うと「それを判断するのは、技術部と品質保証部や。そこに判断させたらエ

エやないか!俺ら輸出部は注文をとって来るのが仕事や。それで市場に合わせた機種を造るのが工場の仕事やないか?新型を中国向けに改造してもらったらエエやないか。まあ、まだ、時間があるから、S島と工務課長によく話をしておくわ」と確信を持って言った。

明石は、これ以上話をしても無駄と思い「分かりました。それでは、調整してください」と言うしかなかった。何かこの仕事はM居の言うような、割り切った考え方の仕事のスタイルでは前に進まないのではと懸念が残った。

今は目の前の韓国対応を、今日の残された時間で考えようと頭を切り替えた。M居が「それと、土産を用意しておけよ!」と言ってきたので「今までは、どんな物を持って行かれましたか?」と尋ねると「連中は、タバコを皆が吸うから、洋もくがええなあ。それも、アメリカのやつや!キャメルかマールボロかな?あいつ等は、アメリカが好きだから、間違ってもハイライトとか、セブンスターを持っていくなよ。韓国の年寄りは、日本の光とか、響、ゴールデンバット、ホープなどを、戦前に吸ってた人もいるので、日本のタバコが好きな人もいるが、昔を思い出して嫌がる人も多いからなあ。それと、ウイスキーはパスポートや。なぜか、このブランドが好きなんや。伊丹空港の免税店で出発前に買って行ったらええわ」と言ってくれた。

「分かりました。輸入課の金課長、企画課李課長、工場長の鄭常務、K商事金さんくらいにお渡ししたら良いですか？」と言うと「まあな。俺は、金課長と、その下の朴係長と、鄭さんだけに渡していたが」と言われたが、又、違和感を感じたが、「分かりました」と答えた。

明石は、韓国、中国、アジアは土産文化と文化人類学の本を読んだこともあり、土産は大事な行為と想っているの、出来るだけ、土産を多く持つて行つて、足らなくなるより、余るほうが良いと思つた。

会社の土産の予算枠がオーバーしても、自腹を切つたら済むことで、物を貰つて怒る人はいない。挨拶代わりで、物を渡すと、貰った人に印象を残す。それが名刺だけは、名前を覚えて貰えない。物を通じて名刺が生きてくるし、それが知り合いになる切っ掛けとなると思っている。それで、昼休みに高島屋に寄つて、10人分位は、ウイスキー、タバコ以外に何かを買つて、それを高島屋の包装紙に包んで、少し高級感を出した土産として持つて行こうと考えた。

頭を整理する為に、大学ノートに、持つていく私物、土産、交渉資料、英文会社案内、販売促進品（キャップ、5色ボールペン、巻尺など）をリストアップしてから、交渉のストーリー書き始めた。まず、K商事の金さんに、K田部長の親書を渡し、これは、明石が書いたもの

であるが内容は、「工場から転勤したばかりの明石が如何に大変な価格改定という重責を担つて、交渉に来たか。2泊3日の予定は、もし目的が達成出来なければ、そのまま韓国に残り、我社の置かれた状況を理解してもらうまで、帰国するなど厳命している。交渉は、値上げではなく、インフレ経済の中で当然、製品価格も日本以上に韓国は15%平均上がっている。当然韓国の部品コストも上がっているが日本も同様に上がっている。又、それに見合う価格改定を、認めないと部品メーカーは事業を継続していけない。」①部品を供給するK社も同様である。鄭常務が宇都宮工場に直接電話され、希望納期を守るように言われたが、まだ、「②（信用状）が開設されてないので、M商事とのK工業との正式契約は交わされていない。従つて、M商事から我社には正式注文書が来ていない。これでは、輸出部として、工場に正式指示が出来ないが、K田は鄭常務と永年の友人で、信用と信頼をしているので、私の独断で特別に工場に製作指示をした。それで、希望納期通りに出来るかの会議を新任の明石に参加させ先日行つた。明石は工場に在籍して

いた経験とその前は本社資材部もあり、宇都宮工場の問題点を指摘して協力を仰いで会議を上手くリードして、希望納期は守るという確約を取つて、現在は工場を上げて対応している。更に、宇都宮工場向けの部品でD工業と共有部品は、納

期短縮の為にD工業向けに回すことにした。更にD工業向けのみの専用部品を、部品メーカーに協力させる為に値上げをして納期を短縮させた。これにより約1週間、希望納期よりも短縮することとなり、全面的に協力体制を敷いて対応している。鄭常務の面子を潰さないように懸命にやっていますので、価格の改定を前年比15%までとは、申しませんが、何卒、明石が具体的にお話申し上げる最低限の価格改定は是非に協力をお願いします」との文面になっている。それを、まづ金さんに、理解してもらい、D工業の金会長と鄭常務のトップ陣に根回しをしてもらうことが、第一幕の交渉のストーリーであつた。

## オクラの山たより（41）

### 困了生

#### 一

十代の頃の蕪村について今回もあれこれと書いていくことにします。

まず、蕪村の母親の死の原因について先回書き落としたもう一つ別の見方を紹介します。それは死産による死亡であるという説です。それを述べているのは近世の俳諧研究に大きな貢献をした尾形仿

（おがたつとむ 一九二〇〜二〇〇九）氏です。その著書である「芭蕉・蕪村」の中で、蕪村の母親の死因が死産によるものと推測されています。その概要をまとめると次の通りです。

蕪村の俳諧と文章とが収められた魅力的な作品「新花摘」は其角が亡き母の追善ために作つた「花摘」にならつて四月八日、灌仏の日を期して一夏一日十句の夏行（げぎよう）僧が夏三ヶ月間外出せず修行すること）を思い立つて安永六年四月に作られたものです。その時、蕪村は六十二歳。その冒頭には次のような一連の句が並んでいます。

- ① 灌仏やもとより腹はかりのやど
- ② 卯月八日死んで生まるる子は仏
- ③ 更衣身にしら露の初めかな
- ④ 更衣母なん藤原氏なりけり
- ⑤ ほととぎす歌よむ遊女聞こゆなる
- ⑥ 耳うとき父入道よほととぎす

①の句は蕪村が「新花摘」のモデルとした其角の「花摘」の冒頭の句にある

### 灌仏や墓に向かへるひとりごと

をふまえた句であり、②の句は母親が死産したことを示唆しています。そして、灌仏の二句のあとに③「更衣……」④「ほととぎす……」と続けたのも同じく其角の「続虚栗（ぞくみなしぐり）」に収める



四月八日、母のみまかりけるに、  
身にとりて 更衣憂き 卯月かな

初七の夜、いねかねたりしに、  
夢に来る 母を帰すな ほととぎす

の二句を下敷きにしたものでしょう。

あらためて①から⑥の句を見てみると  
「受胎・死産・生命・母・父」のイメージを含んだ配列には蕪村と母親、そして父親との関係を暗示する一連のものが隠されているように見えます。

もちろん作者の出自の秘密、それを彼の作品から探り出そうとすることは、文学研究では邪道そのものであり、謹厳な文学者から烈火の如く叱られそうだと前置きした上で、尾形仇氏はあえて小説的な空想をめぐらすと以下のようにになると自分の見方をさらに大胆に書いていきます。

「新花摘」の①と②の句からすると蕪村の母は俗諺で「腹は借り物」といわれるような日陰の存在で、卯月つまり今の五月中旬、初夏の頃に死産がもとで亡くなったのではないか。そのことが、其角が

身にとりて 更衣憂き 卯月かな

と嘆いたのと同じように、四月が死者の白い衣に着がえる季節、白露のときき命

のはかなさを初めて思い知らされた季節として、人の世の無常を十三歳の蕪村の心に深く刻み込む初めとなったのではないか。③の句は初夏ともいえる「更衣」のころが、そうした無常の思いとともに蕪村の心にやるせなく母のことを思い起こさせる季節であることを示していると言われています。

④「更衣母なん……」の句は伊勢物語第十段の「父はなほ人にて、母なん藤原なりける」をふまえたもの。更衣の折りに取り出された母の衣類の紋所が藤原氏につながる家紋であったことで、王朝文化へのあこがれを失わなかった優雅な心性の持ち主だった母をなつかしく想起したという句です。

そして其角が「夢に来る母を帰すな」と呼びかけたホトトギスの啼き音に蕪村はもと歌詠みの遊女として聞こえた母の霊魂の声を聞きつけます。「更衣母なん……」の句と「ほととぎす……」の句との裏面に同じ「伊勢物語」十段に発想した蕪村の盟友太祇の

のぼり  
幟立つ 母なん遊女なりけらし

の句が介在していたことを考えれば「歌よむ遊女」を蕪村の母親と無関係とはいえません。ただし、ここである「遊女」とは一般的な娼婦のことではありません。「撰集抄」巻五に書かれた西行法師と

連歌の酬和をして西行法師をして「六十

余州さそらへて、多くの人を見なれしかども、これほどの者の、かくまで情ばみ

たる者は見はべらざりき」と感嘆せしめた江口の君（平安の昔から有名な淀川河口の江口の里の遊女のこと。優美で教養

が高いことで有名だった。撰閑家の人々や皇族なども相手にした。藤原頼通

も高野山参詣の折立ち寄っている。）のイメージでしょう。⑥の「耳うとき父入道」

の句は耳の遠くなった老いたる父を憐れむ心と高貴なる文化への持ち続けた優雅な母親の心根をついに理解できなかった

「なほ人（平凡な人）」であった父親をうとんじる心が複雑に絡み合っているのを見落とすことはできないと尾形氏は述べ

られています。

以上から尾形仇氏の見方を整理すると蕪村の母は王朝文化への憧れの強い女性であったが、何らかの理由で日陰者のような存在になり、蕪村の弟ないしは妹の死産によって亡くなったということになります。また父親は漢詩文や日本の古典への関心が薄い人であり、母親とはどうもそのり合わない人ではなかったか、と想像されます。ですが、この尾形仇氏の見方も傍証・確証のないものですから、あくまでも参考程度です。先回述べた母親の発狂・入水自殺説とひとくくりにするればおもしろい小説に十分なりそうですが、残念ながら、それは小説家が描いたフィクションの世界の域を出ませ

ん。

蕪村の少年時代の姿は彼の句にあるとおり

辛崎の 臙いくつぞ 与謝の海

のごとく深い霧に包まれた天の橋立の松林の間に浮かんで消えていくいくつもの幻影のように感じられます。

## 二

十三歳で母親を失った蕪村が江戸へ出て俳諧を始めたらしい二十歳の頃まで彼が何処で何をしていたか、確かなことは何も分かりません。前回、紹介した田宮橋庵の「それ蕪村は父祖の家産を破敗させ」という記述が事実とすれば蕪村は十代の半ばに毛馬村の村長も務めていたという家を継ぎながら数年後には破産させたということになります。何度も故郷の伊賀上野に帰っている松尾芭蕉は漂泊の人であっても決して故郷喪失の人ではありませんでした。しかし、四十代以降は京都に住み大坂には何度も出かけていった蕪村はついに一度も故郷の毛馬村に立ち寄ることはありませんでした。その点、蕪村は漂泊者ではありませんでしたが、故郷喪失の人であったといえます。では故郷を棄てる原因となった十代の後半に何があったのか。考える材料は田宮橋庵の「蕪村は父祖の家産を破産させた」と

いう記述しかありませんので、ひよっとしたら大ボラを吹くことになるかもしれませんと無責任な前置きをして、まずは「蕪村は自分の実家を破産させた」ということが事実であるとして当時の状況から多少想像力をたくましくして彼が故郷喪失者となった事情を考えてみようと思います。

享保元年（一七一六）に生まれ天明三年（一七八三）に亡くなった蕪村が生きた時代は江戸中期にあたります。その前半生は江戸幕府中興の祖といわれる徳川吉宗が享保の改革を推し進めた時期に重なり、後半生は重商主義ともいえる田沼意次の時代と重なります。一言でいえば江戸時代にあつて爛熟の時代といえますが、その内実を見ればなかなかそうとはいえません。

江戸時代が始まった十七世紀に日本の人口と新田開発による耕地面積は爆発的に増え十七世紀初めに比べ人口は二・五倍、耕地面積は一・五倍となっています。しかし、一八世紀の百年間で人口は停滞もしくは減少し、新田の開発はほとんど進んでいません。人口と耕地が急増した十七世紀が拡大成長期とすれば十八世紀はその動きが社会全体のキャパシティとの間で、ある種の限界が達した時期といえます。言葉を変えれば量的拡大の時期から質的充実の時期となったといえるかもしれません。

さらにいえば十八世紀は自然災害の多い時代でした。享保・宝暦・天明の大飢饉、南海トラフによる宝永の大地震、富士山・浅間山・桜島の噴火、と書き出していけば次々と出てきます。歴史人口学者の速水融氏は一定の出生数は確保されており本来ならば人口は上昇していたはずであるが、それを上回る飢饉や疫病の流行、人々がなだれ込んだ都市の劣悪な生命環境などによって停滞もしくは減少したと述べています。

もちろん幕府は年貢増徴のために新田開発のために多大な努力をしたのですが、自然の厳しい壁に阻まれて大きな成果を生むことはできませんでした。

このようなところから見えていくと十八世紀は自然環境の厳しい中で十七世紀に拡大した耕地や人口を何とか定着させるべく苦労した時代であつたといえそうです。

こうした時代にあつて幕府領であつた摂津国毛馬村はどのような状況であつたのでしょうか。また、少年蕪村の周辺ではどういった事態があつたのでしょうか。

### 三

蕪村が生まれた一七一六（享保元）年五月に徳川吉宗が八代将軍となります。それと同時に教科書でも有名な享保の改革が始まります。この改革によって吉宗

は江戸幕府中興の祖といわれるようになりますが、この改革とともに百姓一揆が激発することになっていきます。幕府の目線で見れば良い結果であつたにしても百姓の目線で見ればかなり問題のある改革でした。

そもそも吉宗が享保の改革に乗り出したのは危機的な状況にあつた幕府の財政状況でした。主な原因としてよくあげられるのは二つです。

一つは幕臣の大幅な増加です。綱吉は館林から家宣は甲府から、吉宗は紀州和歌山から江戸城の主となりました。当然のことながら殿様一人でやってくるわけはなく、何百人と旧家臣を引き連れてきます。これら大量の武士たちが幕臣に編入されたために切米・扶持米が増加し財政負担が増しました。今でいえば人件費の増加です。とはいえ幕臣のリストラもできず幕府は窮地に立たされます。

二つは幕末の一時期を除いてずっと続いた安い米価と諸品高騰です。全国的にさまざまな商品が生産され大量に流通されるようになった十八世紀ともなると幕府や藩、武士身分の消費活動は活発化します。その一方で幕府・藩の収入の基本は年貢米です。時代を追うごとに盛んになる商品生産・流通から生まれる富（利益）を獲得できなかった点に財政窮迫の根本的な原因がありました。その莫大な富を得たのは商人や生産者でした。江戸時代後期になって幕府や藩が専売制度を

とつて生産・流通過程に商人と同じように介在するまで田沼意次の時代を除いて収入は年貢米が頼りでした。一向に上がらぬ収入、増大する消費支出。幕府の財政改革は急務でした。

しかし、急務とはいえ幕府のとれる経済政策はわずかです。儉約という緊縮財政と新田開発、そして年貢増徴です。先にも書いたとおり新田開発はそろそろ限界に来ていました。となれば残る手段は年貢の徴収をさらに増す年貢増徴策です。これにはいろいろな手段が使われました。

第一に定免法（じようめんほう）の採用です。年貢の率を固定して年貢高を一定にしようというもの。代官によって恣意的に年貢率を決められていたことがなくなつたのは百姓にとつて良かったのですが、幕府は年ごとに過去の平均にいくらか増米（ましまい）を上乗せすること忘れませんでした。朝三暮四ではありませんが、段階的な増税策でした。ただし百姓の側が増米を請けるにあつては可能な範囲というものでしたから、代官と百姓双方に交渉の余地はあつたようです。

第二に石代値段の値上げです。石代納（こくだいのう）は年貢米を銀や銭に換算して収めるという方法です。もともと上方や西国の幕府領では年貢米の三分の一を銀納させるという方法がとられていました。しかし、上方にではなく高額

で売れる商品作物をできる限りの田畑で栽培し、それで得た現金で安価な米を購入し、それを年貢米とすることが広く行われていました。それに対して幕府は年貢のすべてを米納にせよと命じました。

これは上方の百姓にはまことに迷惑な話でおまけに米納になれば年貢米を運搬する手間・費用もかかります。当然のことながら百姓たちは猛反対します。幕府はこの百姓の動きを予想しており百姓等が従来通りの銀納を願い出たときには石代値段を思いっきり上げようともくろんでいました。先ほどの定免法の際の増米と同じく、この場合も代官と百姓とのあいだでせめぎ合いがおこり最終的には両者の力関係で決まりました。

こうした百姓とのせめぎ合いの中で実施された幕府の年貢増徴策の結果、一七二七（享保十二）年には六年前に比べ三十二万石以上も増え年貢総収納量は百六十二万石を記録しています。

他方、年貢増徴策は基本的には百姓に対する収奪強化策である以上、百姓たちの抵抗も強まります。戦国時代が終わってから百年ほどの時代です。百姓の人々にはかつて一味神水を飲み合い領主に対して一致団結して抵抗した「一揆」の記憶が残っていました。

「仕置き（政治）が悪しくば年貢はせぬぞ」

という百姓たちの強い思いのもと、享保の改革が進むにつれて各地で村を越えた広い地域の百姓が団結して起こす百姓一揆が頻発します。十八世紀は百姓一揆の時代といってもいいのです。

江戸時代で本格的な百姓一揆は一六八六（貞享三）年に信州松本藩において年貢増徴に反対しておきた加助騒動であるといわれています。以後、百姓一揆は年に数回は全国でおきることとなります。

そうした一揆の中でまず有名なのは一七二六年に美作国津山藩でおきた山中一揆です。百姓たちは大凶作のために未納となった年貢の免除を求め、同時に領主側に立つて百姓を苦しめてきた庄屋たちの罷免を要求しました。これらの要求を藩役人は認めました。すると百姓たちは村の代表である惣代も自分たちで決めるようになり一時的に百姓自治が実現した「山中コミュニン」のようになったのです。これに危機感を持った津山藩は鉄砲・大筒までも用意した四五〇人の藩兵をくりだして鎮圧しました。藩の記録によれば逮捕者は一四七人。捕えた場ですぐさま打首にされた者は三十八人。取り調べの上で後に処刑された者は六人（うち二人は磔）。一揆の首謀者は打首・獄門が当然とされた江戸時代でもそれは嚴重な取り調べのすんだ後のこと。まともな取り調べなしで即刻処刑は異例のことでした。それをせねばならないほどに従来の支配を拒否する雰囲気は百姓の側にあ

ったのでしょう。

また、一七五四年には領主の年貢増徴策に抵抗して美濃国郡上藩の郡上八幡で郡上一揆が起きます。この一揆では百姓側は首謀者とされた定次郎以下四人が獄門とされましたが、領主の金森頼錦（かなもりよりかね）は改易（領地没収で金森家は断絶）され、金森氏の背後で策動していた老中本多正珍（ほんだまさよし）も罷免されました。百姓の側に犠牲者も出ましたが、その一方で支配者側にも大きな打撃を与えた一揆でした。

さらに一七七一年に郡上八幡近くの飛騨国高山（ここは幕府領で当時の高山代官所が現存しています。）で起きた大原騒動が有名です。この一揆は高山代官所の手勢だけでは鎮めることができず近隣の藩の藩兵を動員してやっとおさめることができました。この時、飛騨一宮の境内に集まった無防備の一揆勢（百姓一揆で百姓たちが竹槍で武装していたというのは史実とはまったく違う。彼らが手にしたのは鍬・鋤・鎌といった農具だけである。（若尾政希「百姓一揆」岩波新書2018参照））に対して藩兵は銃撃を加え多数の死者を出しています。時代が既に泰平の時代から動乱の時代に向いつつあることを象徴する事件でした。

そして、蕪村の生まれ育った近畿地方に目を移せば、一七三三年に丹後国田辺藩の百姓たちが年貢軽減と夫食米（ぶじきまい 飢饉などの天災時に出される救

済の米）を要求して強訴しており、翌年には丹波国福知山藩の百姓たちが年貢軽減と夫食米を要求して強訴しています。

そして、一七四五年には摂津・河内・和泉・播磨などの幕府領の百姓たちが年貢増徴に反対して京都所司代・奉行所に多数押しかけて訴願しています。

もし、蕪村が十代後半に村内の豪農として庄屋見習職つまり村長見習いといった村内をまとめる地位についていたとすれば、享保の改革の進むにつれて徐々に沸きあがってくる百姓等の不満と代官所が次々と出してくる年貢増徴の命令の間にたつてかなり苦しい立場に置かれたはずです。そして、庄屋見習職であった蕪村をさらに追い込む事態が生まれます。一七三二（享保一七）年、西日本一帯に起きた享保の大飢饉です。

飢饉は異常気象によって起きることが多くありました。寛永・享保・天明・天保の四大飢饉はいずれも極めて寒冷な時期に起きています。一七三二（享保十七）年、五月の末から日照りや旱魃が続きましたが夜は寒い日が続きしました。そこへ梅雨時から中国大陸南部よりウンカが大量に飛来して、時に異常発生しました。ウンカは稲の汁を吸って枯らしてしまう害虫で体長は一センチメートルほど、形はセミのようでよく飛び跳ねました。このウンカにより西日本一帯に大飢饉が発生したのです。年貢増徴策によって疲弊した農村に最後のとどめを刺したかのよ

うです。

ウシカによる蝗害とはいえ被害は甚大でした。餓死者は数十万人、おそらく六十万人以上であろうと研究者は推計しています。特にひどい被害が出たのは九州地方ですが、近畿地方でも米の收穫量が平年の六十二パーセントほどにしか達しませんでした。また、西日本から大坂へもたらされる米の量も前年同期のわずか三十七パーセントとなりました。当然、消費都市であった京都・大坂の人々は深刻な飢餓状態となります。そのため幕府による飢民救済の動きだけでなく民間の施行（食べ物の施し）も多くなされました。京都では寺院による困窮者への施行が多く行われています。飢饉時に寺院や僧侶が飢人に施行することは中世以来の伝統だったのです。また、大坂では飢餓救助のための寄付金供出に協力した町人は一万二千人にもなっています。中には二千二百両（今の二億円くらい）もの大金を差し出す商人もいたと記録にはあります。

いうまでもないことですが、飢饉で米が不足すれば米価が高騰します。事実、この享保の大飢饉では普段は一石あたり銀六十匁であったものが、九十匁から百二十匁に跳ね上がりました。

この米価の高騰は蕪村が住んでいた村の百姓たちにとっては大きな打撃だったにちがいありません。なぜなら多くの商品作物を栽培して高収入を得る一方で安

い米を買い求めてそれを年貢として収めるという方法がとりにくくなるからです。村役人でもある庄屋のもとには年貢軽減または免除を求める声がひっきりなしに聞こえて来たことでしょう。

#### 四

さて、田宮橋庵の「蕪村は父祖の家産を破産させた」という記述が事実とすれば蕪村は当時の習慣に従って十五歳の時に代官所（毛馬村は大坂城代の直轄地であった）の認可を得て庄屋見習職に就いたと考えられます。

そもそも庄屋は代官所の支配のもとで主に年貢の収納を中心にして一村の民政を統括しましたが、村民と直結した民政上の権限が大きかったためにトラブルもよく起きました。ですから庄屋は村内の富裕な名望家でなければなりません。基本的には世襲でしたが家が社会的にまたは経済的に没落すると庄屋の職は他家に奪われることもありました。庄屋職は代官所の認可が必要だったからです。何かの村内運営上のミスをして村民の信頼を失えば庄屋職を奪われて意外と早い時間で一家離散という事態となることも珍しいことはありませんでした。その良い例が良寛、つまり山本栄蔵の家です。良寛の生家である山本家は越後出雲崎の由緒ある名主（庄屋のこと。東日本では名主、西日本では庄屋というこ

とが多かった）で、代々世襲でその職を続けてきました。当初、良寛が名主見習いをしていたのですが、読書にふけるばかりで世才のない彼はことに無能ぶりを暴露し「名主の昼行灯、昼行灯息子」と村人から馬鹿にされました。そのためか、十八歳の時、良寛は名主見習いの職を投げ出して出家します。良寛が出家した後は弟の山本由之が家を継ぎますが、一八一〇（文化七）年、弟の山本由之は公金の不正使用を奉行所に訴えられ、その罪により家財は没収、所払いとなり、さらには他家に名主職も奪われて一家は離散しました。

なお、この一家離散の悲劇より早く良寛の父親である山本以南は良寛の弟に家を任せると俳諧風流に身をすねて、あてのない旅の果てに一七九五（寛政七）年、身を京の桂川に身を投げています。以南六十歳、良寛三十八歳の七月でした。思えば一家を不幸が襲ったということだけではなく蕪村と良寛は似通ったところがあります。早くから儒学を学んで漢籍を読むことが好きで村人から「昼行灯」とうとまれた良寛。幼い頃から絵を描くことが好きで詩歌も学んでいたのですが現実の世界では力を発揮できそうになかった蕪村。どちらも生々しい現実世界で利害がぶつかり合う場で政治的な動きをすることに長じていたとは思われません。ましてや蕪村の方は享保の大飢饉によつて代官所からも村民からも強烈な庄

力がかかったに違いありません。蕪村は村人から「アカンタレの役立たず」とそしられて信用をなくしたのか、何かの失敗をしたのか詳細は分かりませんが、結局は「破敗」という事態に立ち至ったのでしょう。良寛の生家は長年続いた名門中の名門であったので多くの記録が残りましたが、それほど家柄でもなかったからか、蕪村の生家については公的な記録が何一つ残っていません。たぶん代官所に訴えが出されただけで簡単に庄屋の職を奪われ、さらには所払いとなつて一家離散となつたのではないのでしょうか。

代官所からも村人からも追いつめられた十代後半の蕪村の孤独感を思うと切ないものがこみ上げてきます。

こうしたことを考えると一七七三（安永二）年に巻かれた歌仙「薄見つ」の巻に（「このほとり」所収）に次のような付け合せがあるのは興味あることです。

黒髪にちらちらかかる夜の雪 樽良

訴へに負けて 所領追はるる 蕪村

女の黒髪に夜の雪が降りかかる樽良（ちよら）の句に蕪村は訴訟に負けて故郷を追われる家族を付けています。前句が「夜の雪」ですから付け句は村人の目を避けて夜逃げ同然に村を出る光景となります。もちろん、十代後半の蕪村にはすでに母はいません。しかし、筆者には離別

されていく母の姿、庄屋職を奪われ夜逃げ同然に村を出ていく父と蕪村自身の姿を重ね合わせて一家離散の悲劇のイメージを蕪村が作り上げたような気がしてなりません。

## 五

摂津国毛馬村を離れた蕪村がどのような経緯で江戸におもむいたのか、不明というほかはなく何の手がかりもありません。ただし、蕪村が江戸に向う前に浄土宗の僧になったらしいことは知られています。蕪村は四十五歳で還俗するまでずっと釈氏の浄土念仏僧であり続けました。そのため蕪村の俗姓が谷氏または谷口氏であることを身近な人々もよく知らなかったようです。

江戸に出た蕪村が俳号を「蕪村」とする前に「宰鳥」を俳号としていました。

宰鳥の俳号で初めて蕪村の句が出てくるのは彼が二十三歳のときのこと。この時期、既に蕪村は夜半亭末阿（巴人）に師事していました。その夜半亭末阿（巴人）の歳旦帖（歳旦開きという年始の行事に披露するために俳諧師が前年の冬のうちに自分と門弟たちの作品を集めたもの。）には次の句があります。これが今のところ最も早く蕪村によって書かれたことが確実な句といわれています。蕪村もこのあたりからスタートしたと思うと興味深い句です。ただし名句とはとても言いが

たく蕪村本人も晩年に編集した自選の「蕪村句集」には入れてはいません。

君が代や 一三度したる とし忘れ

蛇足ながら「君が代」は「今は、いい御時世ですね、めでたいねえ」といった意味で御挨拶の言葉です。江戸時代の人々には「君が代」を「天皇の御代」のことだと考える人はほとんどおらず、平和な時代を祝う寿ぎの言葉と考えられていました。

ですから蕪村の句の内容は「いい御時世だね、二回も三回も年忘れの会をしちやったよ」といったものになるでしょうか。まことに太平の世を祝うおめでたい句です。後世の小林一茶にも

君が代や 繁りの下の 耶蘇仏

という句があり、これも「木の繁りに隠れてキリシタンの『耶蘇仏（隠れキリシタン）が祀っていた偽装の仏像のこと』」があったよ。耶蘇仏がこうして無事なもの、いい御時世というものだね。めでたいことだ。」というくらいの意味でしょう。

最後に、「宰鳥」という俳号を使う前に「西鳥」という俳号を蕪村は使っていたのではないか、という説が研究者の間では昔からあります。宰鳥は西鳥と同じ人物なのだろうか、というわずらわしい議論・考証は避けますが、一七三四（享保

十九）年に来川編「夢物語」に収められた西鳥の句を四句だけあげてみます。どれも中高生が初めて詠んだ俳句のような無邪気さがみられ、初々しい若さが感じられます。

苗代に 村の煙を かぞへけり  
飛ぶ蠅の 雀をなぶる 日向かな  
朝霧や 麓に牛の 吠ゆる声  
汐風に 骨ばかりなる 案山子かな

残念ながら、これらの句が満十八歳となつた蕪村の句であるという確証は何もありません。もし、農村風景が描写されているこれらの句が蕪村の作だとすれば、毛馬村での経験が句の中に反映されているかもしれません。あくまでも筆者の推測ですが。

## 【補足】

### ◇ 蕪村の「夢説」と禪ふんとしの句

一七七五（安永四）年、六十歳の蕪村は次のような夢を見たとい俳文に書いています。題して「夢説」。

風いで穏やかな海に舟を浮かべて楽しんでいたのに、急に舟が金軸（坤軸のこと。大地の中心を貫き大地を支える）とされる軸。地軸のこと）の鉄の綱にガツン

とつなぎ止められたみたいに微動だにしくなくなりました。恐ろしい鰐（ワニザメのこと）に妬まれ魅入られたのだと、舟中の人々が身につけている宝物を海中に投じてワニザメの執念を晴らそうとひそひそ相談しているうちに夢から覚めたというのです。そして、蕪村は「私には身につけた宝物なんかはないから帆風（ほしらみ）のたかった禪をこの春の海に流そう」と、夢を俳諧化して次の句を詠んでいます。

帆風の ふ（ん）どし流さむ 春の海

乗っている舟が突然ガツンと盤石のように動かなくなる恐怖、その恐怖感蕪村の心にあるトラウマ語るものだという蕪村研究者もいます。舟が突然止まる恐怖から夢覚めて、禪が青い春の海に揺らめいて流れていくという句を作ったと蕪村は書いているのですが、新年のめでたさを祝う歳旦の賀文の一節であるので本当にこのような夢を見たかどうかは不明です。トラウマの件は保留とするのが妥当でしょう。

しかし、それにしてもなぜ禪の句なのか。後で述べるように禪を材料とした句が稀少なだけに疑問が残ります。

近世以前には「禪祝い（へこ祝い、たふさぎ祝いともいった）」という成年儀礼がありました。男子が十三歳になると禪を母の実家からもらって、それを締める



という成年の儀式です。蕪村は十三歳のこの禪祝いの年に母親を失いました。だから、禪は死んだ母親との記憶につながるものではないかという説が研究者の間では昔からあります。夢に見た恐怖は蕪村とその母の平和な生活が突然断ち切られた恐怖と不安を表現しているのではないか、という説ですが、いかがでしょうか。

それよりも下世話なことの好きな筆者はめったに使わない「禪」を材料にした句の方が気になります。捜してみても現代の俳句にはさすがに見当たらず、古句をみると次の二句だけが見つかりました。

① 禪の切れて分かる相撲かな 孤桐

② 禪は竿にかかせつ 冬ごもり 木節

①の句は「禪の切れて」がどういう状況をいうのか理解しにくいのですが、たぶん「禪の切れて」つまり禪がはずれて相撲の会場は大騒ぎになったことでしょう。②の句は禪には縁遠い生活をしている我々には禪を竿に掛けて干したらどうして冬ごもりとなるのか、もはや理解しがたい句となっています。どちらも口が裂けても名句とはいえず紹介するほどの句でもありませんが、次の小林一茶の句は「禪」を材料にしてまずまずの作品とはいえないでしょうか。

## ふんどしに 笛つつさして 星迎え

暑さで禪一つ裸同然の姿で七夕の二つの星を迎え祭る「星迎」の行事をする風景です。そして禪姿の男の腰には風流を嗜むのか横笛が差してあります。滑稽味と古典的な雰囲気もあつて名句だとは決していえませんが、「さすが一茶、おもしろい」といえる句だと思います。蕪村の句といい勝負だと思いませんか。

## ◇ 大坂商人の米買い占め

本文中で享保の飢饉の際、大坂で窮迫した人々の救済のため巨額の寄付金をした商人がいたことを記しました。この人の名は大和屋三朗左衛門。この大和屋は大坂の買米御用商人のトップにいた人です。よく知られているように八代將軍吉宗は別名「米將軍」といわれ低迷する米価を何とかしようと米価調整に努力した將軍でした。その低米価対策の一つが商人に米の買い占めをさせること。事実、飢饉直前の享保一六年に幕府は大坂商人一三〇人に米の買い占めを命じています。このとき大和屋だけでも銀二〇〇〇貫目以上の利益を上げた記録は伝えています。金一両を六十匁ほどとして換算すると三万四千両弱になります。空前のもうけとなったわけです。そのため大和屋は翌年に起こった飢饉には「世上」を恐れてわざわざ目立つような額（得た利

益の六・五パーセントくらい）で施行をしたという噂が大坂じゅうにたちました。米売買で利益を上げた者は困窮者に施しをすべきだという空気が広がっていたのです。税金の優遇をずっと受けている現代の富裕層や大企業よりも当時の富裕な商人たちはまだ面の皮は薄かったのでしょうか。

## 隠された歴史（16）

満田正賢

今回は記紀に描かれている神功・応神伝説と、それを信仰対象にした住吉・八幡信仰が北九州一体に集中的に存在している理由について考察します。

筑前一宮は二社あり、神功皇后にゆかりのある住吉神社と応神天皇を主祭神とする宮崎宮です。九州王朝の本拠地とも言える筑後一宮・高良大社の祭神は高良玉垂命（コウラタマタレノミコト）ですが、八幡神と住吉神も同格で祀られています。福岡県福津市にあり幻の筑紫舞が保存されていたため、古田史学では九州王朝と特に関連性が強いと考えている宮地嶽神社の主祭神も公式には神功皇后です。私はいままで特に疑いもせずこの事実を受けとめていましたが、あらためて考えてみるとこの事実には非常に強い違

和感があります。

筑紫を中心とした九州各地には非常に多くの神功・応神伝承が存在します。全国各地にある住吉神社の最古のものは筑前の住吉神社と伝えられています。又同じく全国の八幡宮の総本宮は宇佐八幡宮です。近畿には摂津に住吉大社が、山城に石清水八幡宮がありますが、大和ではありません。近畿天皇家の支配の象徴とされるものは伊勢神宮です。一方日本書紀の神功紀・応神紀を見ても、筑紫における両者の圧倒的な存在感は理解出来ません。神功が筑紫に始めて行幸したのは仲哀八年正月で、翌年仲哀が死去します。神功が新羅征伐のあと、応神をつれて

近畿に戻るはその翌年の神功摂政元年二月です。すなわち神功が筑紫に滞在したのは新羅征伐を含めてほぼ二年間です。まして応神については生後三ヶ月で筑紫を離れたと描かれています。そして神功・応神伝説の神髄はこの母子が妨害を乗り越えて大和朝廷の王となり日本全体を支配したということにあります。なぜこのような人物を祀る神社を筑紫の人々は信仰対象にしているのでしょうか。筑紫には記紀の記述と異なる伝承は残っていません。しかし、神功・応神が実は筑紫の配者だったとか、神功・応神の子孫が筑紫を支配していたという関係が存在してい

なければ、筑紫における圧倒的な両者の存在感は説明出来ないのではないでしょう。か。

神功・応神伝説の考察にあたって、まず記紀に描かれている神功皇后伝説の通説的な理解をご紹介します。通説においても神功紀が史実をそのまま記述しているとして理解している論者はほとんどいません。通説論者による神功伝説の解釈は次のようなものです。

①皇后の諡号・氣長足姫（オシナガラシヒメ）のタラシという語が、舒明（オキナガラシヒロヌカ）、皇極（オキナガタカライカシヒタラシヒメ）天皇の諡号に含まれていて、後世的（七世紀）であること。新羅征伐の物語が斉明天皇の事蹟と似ていること。②神功紀の記事中、「百濟記」からとったと思われる日朝記事を除くと、歴史的事実よりも説話的色彩が強いこと。③四世紀末から五世紀初め「倭」としては対高句麗問題が最重要であるのに、対新羅戦に集約されていること。④応神天皇と河内王朝の問題等々。要するに神功皇后の物語は近江国坂田郡息長（オキナガ）地方の豪族である息長氏（北九州から敦賀あたりにわたり活躍していた海人族の首長）によって伝承された、水辺で神の子を出産する巫女の伝説を核として、古代の卑弥呼や六〜七世紀における大和朝廷の朝鮮経営の歴史、更に斉明天皇のイメージなど

が加味されて出来上がった物語であろうというのが今日の一般的な学説のようです。」

これは、茨木市に三座あり神功伝説をもつ「新屋坐天照御魂神社（ニイヤマスマアテルミタマジンジャ）」がまとめた「平成・新屋神社由来記」にある記述です。この記述は直木孝次郎氏の説（直木孝次郎「神功皇后伝説の成立」―「日本古代の氏族と天皇」塙書房収録）を中心に、諸説を簡潔にまとめているものと思われます。

このような直木孝次郎氏の神功伝説の解釈をベースに塚口義信氏が更に研究を進めています。塚口氏の研究結果を次に紹介します。（「大帯日売考（オオタラシヒメコウ）―神功皇后伝説の史的分析―」日本書紀研究第5冊収録「神功皇后伝説の研究」創元社）

（一）神功伝説における五つの中核的要素は、神話的側面においてはともに共的な要素を有しているけれども、①熊襲征伐における神託物語、②新羅征伐物語、③香坂王・忍熊王反乱の物語、④氣比大神参拝の物語、⑤酒ほがいの物語、はその主題において明らかに一線が画されており、本来切り離して考察すべき性格のものである。

（二）神功皇后伝説の構成要素を素材論的に見れば、息長氏が語り伝えてきた系譜伝承を核に、香椎宮（カシイ

グウ）にまつわる「オホタラシヒメ」の伝承や風土記的な地方伝説が加えられ新たに古代天皇制イデオロギーでもって潤色が施され改編されたであろうということである。

（三）継体天皇と息長氏の関係に関して

①近江の豪族には皇親と称する「君」

姓氏族が多いが、その主要なものは継体をめぐる姻戚関係によって結ばれており、それは「継体出現の基盤勢力に由来するもの」と考えられていること、および式内社が湖北から敦賀湾にかけて濃密な分布を示すのもやはり継体の本拠を湖北地方とすれば理解しやすいこと、などの理由から、継体の本拠は近江（坂田郡）であると考えられる。（岡田精司氏の説の引用）

②継体天皇が息長一族と密接な関係にある若毛野二股王（ワカヌケノフタマタオウ）・意富々杵王（オホホトオウ）より出たとする伝承は、のちの創作ではなく史実に基づくものである。「彦人王―継体」の系譜は、近江の坂田郡に蟠踞する息長一族を介することによって「若毛野二股王―意富々杵王」系譜につながることを確認することが出来る。

③継体の勢力基盤は父系においては近江、母系においては越前にあつたと考えられるが、大和東北部から山背南部、河内北部、摂津にかけての地

域（すなわち木津川・淀川水系）で活躍した息長（オキナガ）、和珥（ワニ）、茨田（マッタ）氏をはじめとする諸豪族も継体の有力な後背勢力であつたと解される。

（四）応神天皇と息長一族との関係について

①香坂（カゴサカ）王・忍熊（オシクマ）王の軍勢を撃滅したのちに、なぜ太子（応神）は禊ぎをするために「氣比大神」のところへ、すなわち越前国敦賀へわざわざ行かなければならなかったのか。

②応神を支援する地方豪族とは、九州のそれよりもむしろ越前国敦賀を掌握している豪族でなければならない。とすれば、それは湖北の大豪族息長氏一族を中心とした勢力としか考えられない。また応神の母が「オキナガラシヒメノミコト」と息長氏を冠しているのもその一証となるであろう。要するに応神は息長一族を中心とした勢力をバックボーンにして香坂王・忍熊王に象徴される大和の勢力と争って勝利を得、王位についたものと思われる。

（五）神功伝説の成立時期について

征服譚の原型は神功伝説における征伐の対象がもっぱら新羅であることから考えて、新羅が我が国にとつて最大の敵国として意識され始めたころ、すなわち継体・欽明朝頃

に成立したように思われる。それはまたその頃に九州において大規模な反乱があった事実からも類推しうる。(＊塚口氏は磐井の乱と仲哀天皇の熊襲征伐譚の類似性に注目しています。)

(六) 播磨風土記などに見られる大帯日売はそれ自身独立した人格とは考えられず、「オシナガタラシヒメ」を指すと判断したい。「オキナガラシヒメ」は「オオタラシヒメ」の発展形態と考える。

(七) 「記」に若帯比売命、「書紀」に稚足姫皇女と記された雄略天皇の皇女が記紀両者に登載されていることは見逃せない。「ワカタラシヒメ」の称号は継体・欽明朝ころにはすでに存在していたと考えた方がよいであろう。

(八) 舒明や皇極すなわち息長氏系の天皇にとってみれば神功伝説は始祖伝説の役割を果たしているわけである。

(九) 神功が仲哀の皇后であったとする所伝にはもとより賛成しえないが、応神の母を「息長」とする伝えには従うべきだと私は主張したい。

以上紹介した塚口氏の研究結果に従うと①神功・応神伝説は九州の豪族ではなく近江・北陸を拠点にしていた息長氏の始祖伝説である。②神功・応神伝説が

成立した時期は継体・欽明朝である。③一般的には息長系の天皇とは舒明・皇極

天皇であると考えられているが、継体天皇そのものが息長系の天皇であり、継体自身が神功・応神伝説を作り上げ宣伝した、と考えることが出来ます。

平安時代の延長五年(九二七年)にまで

められた「延喜式」神明帳には、筑前国住吉神社三座、壱岐住吉神社、対馬住吉神社、と筑前国八幡大菩薩宮崎宮、豊前国八幡大菩薩宇佐宮が載っており、すべて「明神大」という格付けがされています。その他、格付けはされていませんが、豊前国に「大帯姫廟神社」と「辛国息長大姫大目神社」という神功皇后の名を冠する神社があります。一方九州以外では摂津国に住吉坐神社四座、長門国に住吉坐荒御魂神社三座という明神大神社がありますが、その他には陸奥国に一座、播磨国に一座の住吉神社があるのみです。八幡神社は九州以外には記されていません。石清水八幡宮も、応神天皇陵の横に建っている菅田八幡神社も載っていません。以上のことから、神功・応神伝説、特に応神天皇を神格化した八幡信仰は九州を起点にして広まったということがいえます。

塚口氏にかかわらず、通説論者の研究は神功・応神伝説の解釈だけで終わって

います。神功・応神伝説の重要性はそれが記紀という史書の世界のみならず、現実の筑紫の人々の信仰対象・支配イデオロギーになっていることです。現実の筑紫及び九州の人々に対する支配体制との関連で考察できなければ真実に迫っているとは言えないのではないのでしょうか。

私は古田史学の九州王朝論と違って、磐井の乱によって、継体が九州(磐井)王朝を乗っ取ったという仮説を立てています。継体にとって、筑紫から出て近畿王朝の支配者となった応神天皇の五世の孫であるという自己紹介は、筑紫との関係を説明する唯一の方法であり、その為に作られたのが神功・応神伝説だったのではないのでしょうか。

古田史学の九州王朝論に照らし合わせてみると、神功・応神伝説は応神が大和朝廷の王となった歴史を伝えるものであり、倭の五王から続く磐井王朝のイデオロギーではありえません。一方、七〇一年に九州王朝から政権を奪取したとされる近畿王朝が筑紫を支配する為のイデオロギーであったという仮説も成り立たないと考えます。なぜならば、七〇一年時点ですでに近畿王朝による万世一系の大和朝廷一元支配神話の骨格は出来上がっていたはずであり、近畿王朝が七〇一年の時点でイデオロギー的に筑紫を支配しようとするならば、自らが信仰する伊勢神宮(アマテラス)信仰を押しつけることが予想されるからです。

しかし、継体が自ら作った神功・応神伝説を筑紫の人々の信仰の対象とするためには、応神五世の孫である継体自身の子孫が筑紫を支配しているという体制が出来上がっていないならならぬと考えます。わたしは継体―安閑―宣化と筑紫支配が続いた後に、宣化の嫡男である倉之若江王(古事記の記述では嫡男であるが、日本書紀では倉稚綾媛皇女という名の皇女に換えられている)が那津官家に入って倭国(九州王朝)王を継いだという仮説を立てています。この仮説によって始めて、神功・応神伝説が筑紫の支配イデオロギーとなり、現在まで筑紫の人々の信仰対象となっているという事実を説明出来ると考えます。

## 道をゆく (10)

成瀬和之

### 「伊勢本街道」(四)

いにしへの参宮道 途中から

二〇一九年五月三十一日(金)

二〇名の参加

近鉄室生口大野駅一〇時一〇分集合。

奈良交通チャーターバスで田口の血原橋(高度五〇〇m)へ。今日は約七kmの行程。

血原橋から五〇〇mほど行くと不動滝に出ます。説明板に

「三段になって流れ落ちる不動滝の全貌を道から見ることはできませんが、木立の間からは力強い水音が聞こえてきます。」

黒岩の名は、村の中ほどの高みに建つ、明円寺の本堂に向かって左手前にある八葉蓮華に似た黒い岩にちなむとも、曾爾村近くから産出する石炭にちなむともいわれています。」とあります。

ところが、道沿いの樹が伐採されたのか、流れる滝を肉眼で見ることができませんでした。道沿いの風景は変化していくものですね。ラッキーでした。

さらに五〇〇mほど行くと「伊勢本街道」の標識があり、その標識に従って少し上ると黒岩の明円寺に着きました。ここで昼食休憩です。おにぎりを食べていると、S君から枇杷の差し入れ、T君からは伊勢名物「赤福餅」の差し入れがありました。ありがたいことです。

昼食後、例の「黒い岩」の写真を撮りました。そしてF君が集合写真を撮ってくれました。三六〇度の全天周画像の写真は初体験でした。

明円寺から急斜面に点在する黒岩の家々を見ながら杉木立の中をぬけると平地があり、水田が広がっています。平地を通り過ぎると宮城への道と本街道へ

の道の分岐路があり、道標があります。ここからは山道を進みます。狭い山道を進むと左手に「南無阿弥陀仏」の石碑があります。道沿いのところどころに「六字名号碑」と地図に書かれています。南無阿弥陀仏」の石碑のことだったのです。枯れ枝がところどころに落ちて薄暗い山道を進みますが、人ひとりとして出会うことはありません。

峠はまだかと思いつながら進むと、やつと山粕峠（高度六五〇m）と書かれた立て札に出合い、ほっとしました。立て札がないと、「峠」なのかどうかわからない峠です。

峠を越えると林道に出ます。林道を少し行き、谷川の左側の草むした道を下っていくと、岩をくりぬいた中に仏様のようなものを祭っているところに出ました。

「佐田の宮跡・不動尊」です。岩の奥には、空海が修業中に刻んだと伝えられる不動明王の梵字が祭られていると説明板にあります。よく中が見えませんが、説明板には、さらに、「山粕とは、山の栖で山村を意味する」と言われ、明治以降は室生村の大字のひとつとなり、養蚕製糸伝習所や裁判所の出張所などがおかれ、『宇陀の大坂』と呼ばれるほど賑わいました。明治二八年の町村合併促進法の施行によって、翌年一〇月に曾爾村に編入されました」と書かれています。

ここから国道三六九号線に下りて、山粕の高石を通り国道沿いに行くと道が旧

道と新道（三六九号線）に分かれています。ちょうど二一俣に分かれたところに「元伊勢街道 旧問屋敷跡」の石碑が立っています。左手方向の旧街道に進みます。

山粕の町を経て再び国道に出ます。途中は「めだか街道」と称して、メダカを水槽に入れて販売もしています。山粕の町には旅館や茶店が並んでいたといえます。国道を山粕西口バス停から山粕東口バス停まで歩きます。山粕の町は意外に広いです。

山粕東口バス停から、一五時四〇分の奈良交通路線バスに乗車。一六時三〇分榛原駅着。

福寿館で菅谷先生の講演と懇親会です。病み上がりで二回講演及び懇親会をパスしましたが、宴会再デビューを果たしました。

キリシタン大名の高山右近が、一五六四年に宇陀の沢城で洗礼をうけていたと驚きでした。高山右近は、二〇一六年にローマ教皇によって「福者」の称号を授与され、二〇一七年二月七日に大阪城ホールで列福式が執り行われました。

また、南北朝時代に南朝の中心となつた北畠親房ら北畠氏関係資料についても説明されました。

九十五歳にして毎回新たなお話をされる菅谷先生には、ただただ敬服するばかりです。懇親会の時に誰かが「高校時代にもっと古典を勉強しておけばよかった」と語っていました。同感です。

## 編集後記

新型コロナウイルスの拡大が収まりそうにありません。ネットなどでは、非常に多くの情報飛び交っています。極端なのは、この一年間で6500万人が新型コロナウイルスの感染によって世界中でなくなるという説もあります。

いずれにせよ、暖かなれば自然と収まるのではないかと素人の私は考えます。

ところで、一月一六日に私の不注意で階段から転倒し頭などを強打し一週間ほど入院していました。幸い大きな後遺症もなく大分回復してきました。入院していた病院の看護師さんが「今年の一月は救急外来で階段や梯子、自転車などで頭を打って運び込まれる人が多い。手足が動かなくなったり、記憶が消えて呆けたりする人もある。大方は二週間ほどで退院されるが、長引く人もある。」

年齢的には、50〜60才台が多く、脳内出血でも二時間程のオペで済むとか。私の友人もバイクに乗っていて、突然現れた自転車を避けるためによけたら、運悪く側溝に落ちヘルメットをしていたが脊髄を損傷し意識不明になり長期の療養とリハビリで頑張ったが、社会復帰は出来ないでいる。

幸い私は、頭蓋骨陥没、脳内血栓、肋骨一本骨折などであったが、何とか日常生活が出来そうです。頭は怖いです。

# 水、この余りにありふれた、 しかし基本的なもの

水は、余りにありふれているが、しかしまた生きるに基本的な物質である。それくらいことは水に棲む私にもわかる。しかし人間は、ありふれているが千変万化する水の、その顔やその様子に特別な言葉や表現を与えているらしい。らしい、と言うのは、例

によつて川辺を散歩中の老夫婦の会話の聞きかじりだからである。人間は、大切なものには名前を付けるなどしてそれを言葉で区別するようだ。例えばこんな具合らしい。

（1）水の異なる状態への言葉

水 氷 水蒸気 湯 湯気

おひや（冷水） 霧 霜 雪

雹（ひょう） 霰（あられ）

（2）水にたとえる表現

水は低い方に流れる

水は方円の器に従う

淡々として水のごとし

水清ければ魚棲まず

UISスキーを水で割る

水に油

水も漏らさぬ警戒

水もしたたるような

水がつく（大水で浸水）

水をあける

水がはいる

水に流す

水をさす

水を向ける

水を打ったよう

水物、水商売

（水が流動するところから）

水掛け論

湯水のごとく

そういうことであるから、

ありふれたものに奇跡を見なければ

奇跡はどこにも永遠にない

とばかりに、水を五七五や五七五七

七に歌う人もいるらしい。以下はその

オンパレード。

命なきものと命をつなぐ水

ありふれた水が命に満ちる星

水の輪のまんまるまるい命の輪

方円に収まる水の太っ腹

ありふれた水が凶器に変わる夏

いのち生む水はいのちも奪う水

温暖化1℃で空の底が抜け

一滴の水に命もよみがえる

一滴の酒も涙も水の精

一滴の水に見果てぬ万華鏡

一滴の水の向こうに大宇宙

・中村 哲医師の死を悼む

ありふれた水に花咲く命咲く

どこにでも水と平和はない地球

ここにあるどんな不思議に増してなお

水が命を包む不可思議

ありふれた水に奇跡があればこそ地に

もあふれる命も包む

水の星命も命なきものも互いが互いの

一部である星

季節みな美しい国の風景は水あればこ

そ奇跡の造形

一滴の水の中にもある宇宙ひとつの命

にある大宇宙

ありふれた水の怒りか汚染水廃炉への

道ぬかるみにして

ふるさとの神も仏も解けている墓標の

ごとき汚染水タンク

フクシマの核汚染水辺野古の海 怒り

の水の沸騰止まず

極微なる水がつながり海鳴ると確かに

聴きしシールズの声

何もかも水に流せば楽だけど我が身あ

らかた水なれば止す

方円の器に従うという水に懂れていて

角は取らない

それにしても（何にしてもか、分

からないかもしれないが）、サクラを

見る会やカジノ汚職等々をめぐる国

会答弁は、美しい国をほめそやす面々

が、自ら美しいと称する国の言葉をど

れほど蔑ろにしているか、怒りをとり越して悲しいまでに露呈している（らしい）。

招待も参加も言えぬ秘密保護

募っても募集ではない国語力

新聞で広告募集していない

募ったら募集じゃないよ買収よ

今日無いと言って明日は出してくる

等々、などなどー。

## 俳句

土田 裕

残雪の汚れてよりの自己主張

春灯に誘はれて入る酒処

うすうすと色を重ねて山笑ふ

啓塾や虫も戸惑ふ寒暖差

雉鳴けど撃たれぬ世なり野鳥の

会

影山 武司

北国や駅停まるごと雪深し

雪吊を風が鳴らして過ぎにけり

時告ぐる砲座朽ちたり冬ざるる

旧邸に句会の声や白障子

寒潮や刃めきたる水平線

月冴ゆる細きグラスの白ワイン

蒼天の風を呼び込み大根干す

寒月や柵の朽ちたる捨て畑

耳袋声なき声を聞きたくて

春を待つ指一本でピアノ弾き